

日中対訳の主語の有無にみる視点の働き¹⁾

Effect of the Viewpoint on the Appearance of the Subject in Japanese and its Translation to Chinese

加藤 晴子
KATO Haruko

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 日本語における主語の不出現
2. 資料
3. 主語の不出現と視点
 - 3.1. (A)感情・感覚, 欲求を表す動詞・形容詞等の主語の人称制限による主語の不出現
 - 3.2. (B)授受を表す動詞の授受関係の違いによる主語・目的語の不出現
 - 3.3. (C)受身の形式の使用による主語の不出現
 - 3.4. 思考・知覚を表す動詞と主語の不出現

まとめ

キーワード：主語の不出現，視点，一体化，対訳小説

Keywords : absence of subject, viewpoint, integration, translated novel

【要旨】

日本語では、(A)感情・感覚, 欲求を表す動詞・形容詞等の使用に関する主語の人称制限, (B)授受を表す動詞の使用に関する主語の人称制限, (C)受身形の使用範囲の広さなど, 様々な要因により, 主語が現れないことがしばしばある。日本語小説の叙述部分においては, 作者の視点は作中人物のうちのある人物に固定され, いわば作者がその人物に一体化し, あたかもその人物の「着ぐるみ」を着た状態で叙述を進めることが多く, このような叙述方法が上記の要因と組み合わせると, 主語が現れないことによる曖昧性が排除されていると考えられる。一方, 中国語では上記の要因が十分に備わっていないことに加え, 小説の叙述部分においても視点の固



定は日本語ほどには行われなため、主語が頻繁に現れざるを得ないものと考えられる。

In Japanese, the subject of a sentence is frequently absent, but it does not obscure the meaning of the sentence due to the grammatical factors such as (A)person restrictions, (B)benefactive expressions, (C)passive forms. In case of Japanese novels, fixed viewpoint, in other words integration with the character, also enables the zero-subject to avoid ambiguity, often with the support of the above factors. It becomes effective when the author fixes the narrative's viewpoint mainly to one of the characters in the story, as if the author has worn the "costume" of that person. In contrast, a subject is usually explicitly indicated in Chinese novels because the above factors can not be fully utilized, and also because the viewpoint occasionally switches within the narrative.

はじめに

日本語では、(A)感情・感覚、欲求を表す動詞・形容詞等の使用に関する主語の人称制限、(B)授受を表す動詞の使用に関する主語の人称制限、(C)受身形の使用範囲の広さなど、様々な要因により、主語が現れないことがしばしばある。日本語小説の叙述部分（いわゆる「地の文」）においては、作者²⁾の視点³⁾は作中人物のうちのある人物に固定され、いわば作者がその人物に一体化し、あたかもその人物の「着ぐるみ」を着た状態で叙述を進めることが多く、このような叙述方法が上記の要因と組み合わさって、主語が現れないことによる曖昧性が排除されると考えられる。一方、中国語では上記の要因が十分に備わっていないことに加え、小説の叙述部分においても視点の固定は日本語ほどには行われなため、主語が頻繁に現れざるを得ないものと考えられる。本稿ではこのことを検証するために、日本語小説を中国語対訳と対照し、訳文中に原文にはない主語が補われている箇所に注目して考察を行なう。

1. 日本語における主語の不出現⁴⁾

日本語では主語が現れないことがしばしばあることはよく知られているが、その要因としては、以下のようなものが挙げられる^{5)・6)・7)}。

(A)感情や感覚、欲求を表す動詞等は、主語の人称により形式が変わる。

・一人称：楽しい、知りたい 二・三人称：楽しそう 知りたがる

(B)授受を表す動詞・補助動詞は、与え手と受け取り手の人称の違いにより動詞が変わる。

・一人称から二・三人称へ：あげる、二・三人称から一人称へ：くれる、もらう

(C)受身の形式を使う

- ・受け手が一人称：先生にほめられた。⁸⁾

(D)敬語の体系がある

- ・主語が二人称で目上の場合：明日はいらっしゃいますか。

日本語小説において、これらの要因によって主語が現れないメカニズムを考えると、作者の視点との関わりに言及せざるを得なくなる。つまり、小説の叙述部分において、作者の視点が一か所に固定され、一貫してその視点からの叙述が行なわれることを前提にした上で、上記の要因が働くことにより、主語が現れないことによる曖昧さが避けられているものと考えられる。中でも上記(B)、(C)と視点の関係については、久野 1978 が、「授与動詞の視点制約」、「受身文のカメラ・アングル」としてルール化している(後述)。

本稿では、日本語の三人称小説の叙述部分とその中国語訳文を対照することにより、日本語における視点の固定化＝一体化が、上記(A)～(C)とともに⁹⁾、主語(一部は目的語)の不出現に対してどのように機能しているか、一方、これらの要因やメカニズムを充分には備えていない中国語では主語の出現状況がどのようにであるかについて考察する。

2. 資料

本稿で利用した資料は北京日本学研究中心2003「中日対訳コーパス」である。そのうち、川端康成『雪国』については、日本語原文とともに3種の中国語訳が収録されている。以下本稿の引用例中では、それぞれ、原文に(J)、叶谓渠訳に(Y)、侍桁訳に(S)、高慧勤訳に(G)の記号を付す。また、各引用の日本語原文末尾の[]内にコーパス中の段落番号を示し、段落の区切りを「//」で示す。

本稿では、まず、原文、訳文の全文を対象に、人物を指す名詞句、代名詞¹⁰⁾など(以下「人名詞・代名詞」と称す)をマークした。次に、中国語訳文に人名詞・代名詞が現れている箇所、日本語原文の該当箇所にそれが現れていない場合、不出現として¹¹⁾「 ϕ 」を加え、あるべき助詞を()内に補った。人名詞・代名詞と「 ϕ 」には、「i, j, …」を付して人物を区別した。更に、これらのうちで、日本語原文において動作または属性などの担い手となっているものを主語として、後接助詞も含め下線を引き、訳文の該当箇所にも下線を引いた。以上の示し方を下表に例示する。

| 行番 | 雪国(J) | 雪国 (1) 叶訳(Y) | 雪国 (2) 侍訳(S) | 雪国 (3) 高訳(G) |
|----|--|--|--|--|
| 40 | 【前略】 <u>男i</u> は窓の方を枕にして、 <u>娘j</u> の横へ折り曲げた足をあげていた。三等車である。 <u>φi</u> _(±) <u>島村k</u> の真横ではなく、一つ前の向側の座席だったから、横寝している <u>男i</u> の顔は <u>φi</u> 耳のあたりまでしか鏡に写らなかった。 | 【前略】 <u>男人i</u> 头靠窗边躺着，把弯着的腿搁在 <u>姑娘j</u> 身边。这是三等车厢。 <u>他们i+j</u> 的座位不是在 <u>岛村k</u> 的正对面，而是在斜对面，所以在窗玻璃上只映出侧身躺着的那个 <u>男人i</u> 的半边脸。 | 【前略】那 <u>男人i</u> 朝着窗口的方向，蜷着腿搭在 <u>姑娘j</u> 的身旁。这是三等客车，因为 <u>他们i+j</u> 的座位不是和 <u>岛村k</u> 在一排上而是在前一排的斜对面，所以那侧卧着的 <u>男人i</u> 面孔，在镜中只映现到耳边。 | 【前略】 <u>男人i</u> 的头靠窗枕着，蜷着腿，放在 <u>姑娘j</u> 身旁。这是三等车厢。 <u>他i</u> 和 <u>岛村k</u> 不是并排，而是在对面一排的另一侧。 <u>男人i</u> 侧卧着，窗玻璃只照到 <u>他i</u> 耳朵那里。 |

人名詞・代名詞の出現数を数えたところ、原文(J)で1170、叶訳(Y)で1724、侍訳(S)で1873、高訳(G)で1518となった。この結果から、中国語訳文には日本語原文にない人名詞・代名詞が現れており、そのため、人名詞・代名詞の出現数が、原文の約1.3~1.6倍になることがわかる¹²⁾。ただし、訳による出現数のばらつきがあり、3種の訳のうちでは、侍訳(S)が最も多く、高訳(G)が最も少ない。ということで、高訳(G)では、中国語として最低限必要な箇所人名詞・代名詞が加えられていると考えて、これ以降の考察では、主に原文(J)と高訳(G)とを対照し、必要に応じて叶訳(Y)、侍訳(S)にも触れることとする¹³⁾。

3. 主語の不出現と視点

以下、資料から得られた例を示し、日本語原文での主語（一部は目的語）の不出現に対する上記要因(A)~(C)の働きと視点との関係を、中国語訳文に対応させながら見ていく。

3.1. (A)感情・感覚、欲求を表す動詞・形容詞等の主語の人称制限による主語の不出現

今回の資料からの例を挙げる。

(1J) 顔を両手で抑えて、髪が毀れるのもかまわずに倒れていたが、【中略】駒子iも自分ながら楽しげに笑い続けた。面白いほど早く酒が醒めて来た。φi_(±)寒そうに肩を顫わせた。[443]

(1G) 两手捂着臉，也不怕弄坏髮髻，径自躺了下去。【中略】驹子i自己也乐不可支地笑个

不停。倒也出奇，酒反而很快就醒了。她_i好像挺冷的样子，肩膀直打颤。

原文では、「～そう」の形式から、現れていない主語は一人称、つまり、この場面の叙述者ではありえず、三人称つまり「駒子」であることがわかる。中国語には「～そう」に対応する形式はないことから、訳文では、“好像挺冷的样子(とても寒いようだ)”と、主語“她(彼女)”を加え、叙述者の観察による情景描写の形を取っている。ただし、日中両語ともに、ここで叙述者、つまり、この視点を取って観察する者が、作者なのか、「島村」なのかについては、検討の余地がある(3.4.4 参照)¹⁴⁾。

3.2. (B) 授受を表す動詞の授受関係の違いによる主語・目的語の不出現

要因(B)については、久野 1978 が視点との関係を指摘している。

授与動詞の視点制約(久野 1978:141-142 一部省略)

「クレル」は、話し手の視点が、主語(与える人)よりも与格目的語(受け取る人)寄りの時にのみ用いられる。「ヤル」は、話し手の視点が主語寄りか、中立の時にのみ用いられる。

*太郎ガ(太郎ノ)弟ニオ金ヲクレタ。【「太郎」寄りに反する】

(?)次郎ノ兄サンガ次郎ニオ金ヲヤッタ。【「次郎」寄りに反する】

今回の資料からの例を挙げる。

(2J) 師匠の家の娘_iなら宴会を手伝いに行ったにしろ、踊を二つ三つ見せただけで帰るから、もしかしたらφ_{i(給)}来てくれるかも知れないとのことだった。[96]

(2G) 师傅家的姑娘_i, 虽然去宴席上帮忙, 顶多跳上二三个舞就会回来的, 说不定她_i倒能来。

原文のこの場面では、作者が「島村(受け取る人)」と「女(与える人)」のうち「島村」寄りの視点を取って叙述者になっているため、「くれる」を使うことにより、現れていない主語が「女」であり、現れていない与格目的語が「島村」であることがわかる。訳文では、“她(彼女)”=「娘」を主語にし、“能(できる)”を使っており、授受の関係は示されていない。

授受を表す動詞の違いによる不出現は、主語よりもむしろ、与格目的語においてより多く見られる。例(3)では二重下線で示す。

(3J) 【前略】 ϕ_i _{駒子(ト)}宿の女の子jを火燵へ抱き入れて余念なく ϕ_j _(ト)遊んでは、正午近くにその三つの子jと湯殿へ行ったりした。// ϕ_i _(ト) 湯上りの髪に櫛を入れてやりながら、

【後略】 [552//553]

(3G) 【前略】 有时驹子i把她j抱到暖笼里，一心一意地逗她j玩，将近中午的时候再领她j去洗澡。//洗完澡，一边给她j梳头，一边说：【後略】

原文のこの場面では、作者が「駒子（与える人）」と「女の子（受け取る人）」のうち、「駒子」寄りの視点を取って叙述者になっているため、「やる」を使うことにより、現れていない主語が「駒子」、与格目的語が「女の子（受け取る人）」であることがわかる。中国語では、授受を表す動詞が“给”のみなので、訳文では、主語は前の段落を受けて加えられていないが、与格目的語“她（彼女）”が加えられている。

3.3. (C) 受身の形式の使用による主語の不出現

要因(C)についても、久野 1978 が視点との関係を指摘している。

受身文のカメラ・アングル（久野 1978:130 一部省略および順序入れ替え）

受身文のカメラ・アングルは、新しい主語の指示対象寄りである。

Then, Mary was hit by John.

??Then, John's wife was hit by him

Then, Mary was hit by her husband.

今回の資料からの例を挙げる。

(4J) あんなことがあったのに、手紙も出さず、会いにも来ず、踊の型の本など送るという約束も果さず、女iからすれば ϕ_i _(ト) ϕ_j _{島村(ト)} 笑って忘れられたとしか思えないだろうから、【後略】 [83]

(4G) 既然有过那种事，竟然信也不写，人也不来，连本舞蹈书都没有如约寄来。在她i看来，人家j是一笑了之，早把自己i给忘了。

原文では、「島村」の内面の吐露として、「女からすれば」によって「女（被る人＝新しい主語）」寄りの視点を取ることが明示され、そこから現れていない主語が「女」であることがわかる。ここではむしろ、現れていない「忘れた人（被らせる人）」が誰であるかのほうが、この引

用箇所のみでは手がかりがなくわかりにくい。訳文では、“在她看来（女から見れば）”の後を女自身の発話のように表現し，“人家（人）”＝「島村」を主語とし，“自己（自分）”＝「女」を“把（受動者マーカー）”の目的語として加えている。構文的には、迷惑を被ったというニュアンスが原文より薄く感じられるが，“给（“把”とセットの助詞）”の使用でそれを補っていると考えられる。なお、原文の「だろうから」は、「島村」の推測を表しており、推測の動詞とその主語がともに現れていない（3.4.4 参照）。

(5J) 駒子*i*はうなずいた。浜松の男*j*に $\phi i_{(t)}$ $\phi j_{(t)}$ 結婚してくれと追い廻されたが、 $\phi i_{(t)}$ どうしても男*j*が好きになれないで、ずいぶん迷ったと $\phi i_{(t)}$ 言った。[449]

(5G) 驹子*i*点了点头。她*i*说，滨松那个人*j*一直缠着她*i*，叫跟他*j*结婚，可驹子*i*压根儿不喜欢他*j*，始终拿不定主意。

原文では作者が「駒子」寄りの視点を取って叙述者になっているものとすれば、「浜松の男（被らせる人）」の「駒子（被る人＝新しい主語）」に対する行為が「駒子」の感ずる迷惑として受け身形で表現されていることから、現れていない主語が「駒子」であることがわかる。訳文では、“那个人（その人）”を主語とした能動文とし，“她（彼女）”＝「駒子」を目的語としている。構文的には迷惑を被ったというニュアンスが原文より薄く感じられるが，“缠着她（彼女につきまとう）”といった表現でそれを補っていると考えられる。他の2つの訳も見てみると、迷惑のニュアンスを表すために、叶訳(Y)では“缠住要她（まわりついて彼女を欲する）”，侍訳(S)では“逼着我（私に無理強いする）”と、それぞれ工夫していることがわかる。特に侍訳(S)では、直接引用の形式はとっていないにも関わらず，“逼着我（私に無理強いする）”“我怎么也不喜欢他（私はどうしても彼が好きになれない）”と、2箇所“我（私）”が現れている。これにより“说（言う）”以下が「駒子」自身の発したことばとして感じられ、「駒子」の迷惑感が表現されている。

(5Y) 驹子*i*点点头。她*i*说，滨松那个男人*j*死皮赖脸地缠住要她*i*同他*j*结婚，可她*i*怎么也不喜欢他*j*，真为难啊。

(5S) 驹子*i*点了点头。她*i*说，滨松的那个男人*j*，不离左右逼着我*i*跟他*j*结婚，可是我*i*怎么也不喜欢他*j*，好久不知道怎么办才好。

受身文の中には、例(6)のように、迷惑のニュアンスがないものもある。

- (6J) 島村はあけびの冷たい実を握ってみながら、ふと帳場の方を見ると、葉子iが炉端に坐っていた。//おかみさんiが銅壺で爛の番をしている。葉子jはそれiと向い合って、 $\phi_{i(j)}$ なにか言われる度に $\phi_{i(j)}$ ははっきりうなずいていた。[1026//1027]
- (6G) 岛村看着握在手里冰凉的通草籽，偶然朝帐房那边望了一眼，见叶子j正坐在地炉边上。//老板娘i守着铜壶在温酒。叶子j面对着她i，老板娘i说句什么，叶子j便爽快地点一点头。

原文では作者が「葉子」寄りの視点を取って叙述者になっているものとすれば、受身形で表現されていることから、「おかみさん（被らせる人）」と「葉子（被る人＝新しい主語）」のうち、現れていない主語が「葉子」であることがわかる。ただし、この情景を観察して「葉子」よりの視点を取っているのが、作者であるか「島村」であるかについては、検討の余地がある（3.4.4参照）。訳文では“老板娘（おかみさん）”と“叶子（葉子）”が交互に主語になっている。

3.4. 思考・知覚を表す動詞と主語の不出現

以上に挙げた(A)～(C)のほかにも、今回、コーパス内で主語の不出現が多く見られたケースとして、思考や知覚を表す動詞の主語がある。特に、知覚を表す動詞の場合、主語とともに知覚を表す動詞自身も現れないことがある。以下に、それぞれ例を挙げる。

3.4.1. 主語のみ不出現の場合

- (7J) 駒子iは三の糸を指ではじき切って付け替えてから、調子を合わせた。その間にもう彼女iの音の冴えは $\phi_{i(島村j)}$ 分ったが、[512]
- (7G) 驹子i用手指把第三弦给挑断，换上新弦，定好音。仅这几下，岛村j便已听出她i琴艺的精湛纯熟。

原文では、直前の文の主語が「駒子」であるにも関わらず、「分かった」の主語「島村」は現れていない。訳文では、“島村（島村）”を主語として加えている。

3.4.2. 知覚を表す動詞も不出現の場合

さらに、知覚を表す動詞の場合、主語とともに知覚動詞自身も現れないことがある。訳文には、その箇所主語が補われることが多い。例を挙げる。

- (8J) 彼女等iが汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すような娘iの美しさ(を) $\phi_{i(島村j)}$ 動詞=

見て(それ)に驚いて目を伏せる途端、娘iの手を固くつかんだ男kの青黄色い手が見えたものだから、島村jは二度とそっちを向いては悪いような気がしていたのだった。[41]

(8G) 但是他俩i刚上车时，岛村j看到姑娘i那种冷艳的美，暗自吃了一惊，不由得低头垂目；蓦地瞥见那男人k一只青黄的手，紧紧攥着姑娘i的手，岛村j便觉得不好再去多看。

原文では、「～に驚いて」と驚いた対象を直接示しているが、訳文では、主語と知覚動詞を加え、“島村看到～，暗自吃了一惊，（島村は～を見て，ひそかに驚いて）”としている。

3.4.3. 「〈主客合一〉的な事態把握」と「主観性的表現」

3.4.1, 3.4.2 に挙げた例に見られる現象は、池上 2012 や李 2016 が日本語の特徴として指摘する「〈主客合一〉的な事態把握」(池上 2012) に基づく「主観性的表現」(李 2016) に相当すると思われる。

池上 2012 は、「〈主客合一〉的な事態把握」と「〈主客対立〉的な事態把握」の2つの異なる認知のタイプを挙げている。「〈主客合一〉的な事態把握」とは、話者が言語化しようとする事態の内に身を置き、当事者として体験的に行う事態把握であり、実際には事態の内に身を置いていない場合でも、心理的な自己投入を経て、あたかも当事者であるかのように体験的に事態把握するものであるとする。一方の「〈主客対立〉的な事態把握」とは、話者が言語化しようとする事態の外に身を置き、傍観者として客観的に行う事態把握であり、実際には事態の中に身を置いている場合でも、心理的な自己分裂を経て、分身を事態の外に移動させ、傍観者のように客観的に事態把握するものであるとする。池上 2012 は日本語と英語の例を挙げる。

〈主客合一〉と〈主客対立〉(池上 2012:8)

(a) 「ここはどこですか？」

(b) “Where am I?” (直訳「私ハドコニイマスカ」)

池上 2012 は、(a)では、見知らぬ場所であたりを見廻している自分は、自分自身には見えず、言語化の対象になっていないのに対し、(b)では、話者が事態の外に抜け出し、事態全体の中に残された自らの分身も言語化の対象になっているとする。池上 2012 によれば、2つの認知タイプのうちどちらを好むかは言語によって異なるが、日本語は「〈主客合一〉的な事態把握」を好み、その現れの1つとして、話者および視覚動詞の「ゼロ化」を挙げている。

話者および視覚動詞の「ゼロ化」(池上 2012:13)

(c) 「外へ出たら、月が明るく輝いていた。」

(d) “Going out, I saw the moon shining brightly.”

次に李 2016 は、本稿と同じく、中日対訳コーパスを資料に、言語表現における様々な「主観性」の現れを対照したものである。その1つに、中日両語での知覚動詞の使用頻度の違いを挙げ、日本語は中国語より知覚動詞を使わない傾向が強く、主観性の高い「主観性的表現」を多用することを指摘している。李 2016 は以下の例を挙げる。

知覚動詞の不使用に見る主観性 (李 2016:7)

(e) 倪藻睡了一觉了，醒来尿尿，看到父亲还在灯下查字典。

(f) 倪藻が一眠りしてお手洗いに起きると、父はまだ明りの下で辞書を調べていた。

李 2016 によれば、(e)のほうは動詞“看到(見た)”が使われているが、(f)のほうは動詞「見た」は使われず、見る主体の見た光景だけが言語化された「主観性的表現」である。

3.4.4. 「二重の一体化」

本稿でさらに問題にしたいのは、では前節に挙げた(f)において、この光景を知覚し言語化しているのは誰か、という点である。この場面の中に身を置いて事態を把握しているのは作中人物である「倪藻」である筈だが、実際に、その認知を言語化しているのは作者である。とすれば、「倪藻」が事態の中の自己に一体化している以上、その認知を叙述する作者も、「倪藻」に一体化していることになるのではないか。つまりここでは「二重の一体化」が起こっているものと考えられるのである。日本語の小説の叙述部分において、作者はまず作中人物の「着ぐるみ」を着て、その人物と一体化し、さらに、「〈主客合一〉的な事態把握」により、事態の中にいるその人物と一体化して「主観性的表現」を行うことになる。

(e)では、“睡了一觉(一眠りする)”も“醒来尿尿(お手洗いに起きる)”も“看到父亲还在灯下查字典(父が～しているのを見た)”も、いずれも“倪藻(倪藻)”の行う行為として列挙されており、作中人物“倪藻”が事態の外にいるのみならず、作者もまた外から客観的に“倪藻”の行為を観察し言語化している。

日本語小説の叙述部分における「二重の一体化」の観点から、すでに挙げた例のいくつかを再度見てみよう。

(9) 顔を両手で抑えて、髪が毀れるのもかまわずに倒れていたが、【中略】駒子も自分な

がら楽しげに笑い続けた。面白いほど早く酒が醒めて来た。φi_(i)寒そうに肩を顫わせた。[443] (= (1J))

(10) あんなことがあったのに、手紙も出さず、会いにも来ず、踊の型の本など送るという約束も果さず、女iからすればφi_(i)φj_(j)_{島村(i)}笑って忘れられたとしか思えないだろうから、【後略】[83] (= (4J))

(11) 島村はあけびの冷たい実を握ってみながら、ふと帳場の方を見ると、葉子jが炉端に坐っていた。//おかみさんiが銅壺で爛の番をしている。葉子jはそれiと向い合って、φi_(i)なにか言われる度にφj_(j)はつきりうなずいていた。[1026//1027] (= (6J))

例(9)では、「駒子」が「寒そう」であるという様子を観察したのは、誰であろうか。作者である可能性もあるし、「島村」である可能性もある。よりありうる可能性としては、作者と「島村」が一体化した叙述者であり、「見えた」などの知覚動詞は使わずに、叙述者の見た光景だけが述べられている。

例(10)では、作者は同じく「島村」と一体化し、「島村」の思考の内容を述べているが、さらにこの叙述者は「駒子」寄りの視点からの叙述を行なっている。

例(11)でも、「おかみさん」と「葉子」のやりとりを観察したのは、作者である可能性もあるし、「島村」である可能性もある。よりありうる可能性としては、作者と「島村」が一体化した叙述者であり、「見えた」などの知覚動詞は使わずに、叙述者の見た光景だけが述べられている。さらに叙述者は「葉子」寄りの視点からの叙述を行なっている。

次の例(12)では、訳文の最後の1文に主語“她(彼女)”を加えているが、これは誤訳に属すると考えられる。この前の数段落が「島村」の情感を述べていることから考えて、ここでは作者の視点は「島村」に固定されており、「西日に光る遠い川を女はじっと眺めていた。」は、作者と「島村」が一体化した叙述者が目にした光景である。とすれば「手持無沙汰」になったのは「駒子」ではなく、段落を越えて「島村」であろう。

(12J) 島村iが背を寄せている幹は、なかでも最も年古りたものだったが、どうしてか北側の枝だけが上まですっかり枯れて、その落ち残った根元は尖った杭を逆立ちに幹へ植え連ねたと見え、なにか恐い神の武器のようであった。//【中略】七日間の山の健康を簡単に洗濯しようと思いついたのも、実はφi_(i)初めにこの清潔な女jを見たからだったろうかと、島村iは今になって気がついた。//西日に光る遠い川を女jはじっと眺めていた。φi_{(作者=島村)(i)}手持無沙汰になった。[187//188//189]

(12G) 島村i背靠着的那棵树干，是棵老树，也不知怎的，朝北的一側，枝桠从下面一直枯到树

頂，光秃秃的，宛如倒栽在树干上的尖木桩，像是一件凶神恶煞的武器。//【中略】这时他_i才发现，在山上待了七天，养精蓄锐，之所以想把过剩的精力一下子消耗掉，实在是因为他_i先就遇见了这个洁净的姑娘她_j。//她_j凝目远望，河流在夕阳下波光粼粼¹⁵⁾。她_j有些发窘。

他の2つの訳では，原文同様，主語を示さないことで，原文と同程度の曖昧さを持ったまま，誤訳となることを回避している。

(12Y) ～。//女子_i目不转睛地望着远方夕晖晚照的河流。她_{i(2)}闲极无聊，觉着有些别扭了。

(12S) ～。//她_j目不转睛地凝视着在夕阳下闪光的远方河流。她_{i(2)}实在闲得无聊。

まとめ

以上，本稿で見えてきたように，作者や話し手自身の視点が現れる一人称小説や会話部分に限らず，視点が現れにくいと考えられる三人称小説の叙述部分においても，作者の視点が作中人物のいずれか一人（多くは主人公やそれに近い人物）のもとに固定されるのが日本語小説の特徴である。作者はあたかも作中人物の「着ぐるみ」を着た状態で叙述を進める。日本語三人称小説における主語の不出現は，このような視点の固定化＝作者と作中人物との一体化にも支えられている。視点の固定化・一体化と，冒頭に挙げた(A)～(C)などの要因が組み合わさって，主語の現れない叙述を可能にするのである。またさらに，この叙述者が小説中の事態の中の他の人物寄りの視点を取り，その人物と一体化する，「二重の一体化」も見られる。

一方，中国語では，(A)～(C)などのような要因に乏しく，かつ，視点が日本語ほどには固定されないことから，人名詞・代名詞で主語を明示せざるを得ない。さらにそのため，主語の不出現や視点を利用した特定の構文を使うことによって，特定の作中人物に寄り添った叙述をすることは難しい。かわりに，他の語彙的手段などで補っているように伺えるが，この点については，今後の課題とする。

本稿で取り上げなかった要因による不出現にも，視点に関わるのか否か，についても，今後さらに考察を進めていきたい。

注

- 1) 本稿は，第九届日対比语言学研讨会（2017年8月20日於北方工业大学）での発表に加筆・修正したものである。会場で貴重なご指摘・ご意見をくださった方々に，この場を借りて，感謝の意を表す。
- 2) 本稿では，作者と叙述者を以下のように区別する。小説世界の外において，筋の展開を考え，視点を選択する者を「作者」とし，小説世界の中において，特定の視点を持って叙述を行う者を「叙述者」とす

- る。叙述者は、作者が単独でなることもあれば、作中人物と一体化してなることもあると考える。
- 3) 視点を「視座」(どこから見るか)と「注視点」(どこを見るか)とに分ける考え方もあるが、本稿では「視点」という語で「視座」を指すこととする。
 - 4) 関連の概念として、「主語の省略」「ゼロ主語」「潜在的な主語」などいくつかあるが、本論ではこれらをまとめて「主語の不出現」とする。
 - 5) 姚 1994、郑 2004 をもとに筆者がまとめたもので、例は筆者による作例である。
 - 6) (B)(C)(D)は連体修飾語の不出現の要因となることもある。(B)+(D)の例:(わたしの)名刺を差し上げる、(あなたの)名刺をいただく、(C)の例:(わたしの)名前を呼ばれた。(D)の例:(わたしの)父、(あなたの)お父様、(あなたの)お名前
 - 7) (A)~(D)以外に、姚 1994 は「は」と「が」の使い分けや主体の交替の調整を、郑 2004 は「たら」「なら」「ように」などの助詞の使用を、それぞれ日本語での主語省略の要因として挙げている。
 - 8) 同じ内容を中国語では“老师表扬了我。(先生が私をほめた)”と表現する。
 - 9) (D)敬語については、会話文にのみ見られたため、今回は扱わない。
 - 10) 中国語では“代词”とするが、一律「代名詞」と称することにする。
 - 11) 主語省略の定義・分類については、陈 1987、姚 1994 等を参照。日本語と中国語のそれぞれの原文で対照を行なうには、文、主語、省略について定義することが必要となる。
 - 12) 小説中の会話部分では、原文の約 2.2~2.7 倍の人を指す語が現れ、叙述部分より差が大きいことがわかる。
 - 13) 引用が長文になるため、グロス省略した。ポイントになる語句については、本文中の()内に訳を示した。
 - 14) 例(1G)で、間にはさまった「面白いほど早く酒が醒めて来た」は、この引用箇所のみからでは誰の酒が醒めて来たのかが不明である。この場面では、「駒子」のみが酔っている、という理解があって初めて「駒子」の不出現であることがわかる。
 - 15) 例(12G)の“河流在夕阳下波光粼粼(川の流れば夕日のもとで光っていた)”の箇所は、光景だけが述べられており、この光景を目にしているのが誰かは曖昧である。

参考文献

- 陈平 1987 〈汉语零形回指的话语分析〉《中国语文》第 5 期 pp.363-378.
- 姚灯镇 1994 〈日汉主语承前省略的比较〉《日语学习与研究》第 1 期 pp.46-52
- 郑玉和 2004 〈日语和汉语人称词的使用与主语隐现〉《日语学习与研究》第 2 期 pp.34-37
- 朱芬 2013 〈汉日篇章零形回指对比及其在翻译中的应用〉《日语学习与研究》第 1 期 pp.121-127
- 池上嘉彦 2012 「〈言語の構造〉から〈話者の認知スタンス〉へ—〈主客合一〉的な事態把握と〈主客対立〉的な事態把握—」『國語と國文學』VOL.89-11 平成二十四年十一月特集号 pp.3-17、東京大学国語国文学会、明治書院
- 王鳳莉 2007 「日本語と中国語の対照研究—主語の省略をめぐる—」『人間文化研究科年報』第 23 号 pp.79-90、奈良女子大学大学院人間文化研究科
- 金谷武洋 2010 『日本語は敬語があって主語がない 「地上の視点」の日本文化論』光文社新書
- 久野 暉 1978 『談話の文法』大修館書店
- 李奇楠 2016 「中国語・日本語の構文から見る主観性」小野正樹・李奇楠編『言語の主観性 認知とポライトネスの接点』くろしお出版 pp.1-17